



事務員の立場から 東日本大震災 第一次災害派遣医療チームに参加して

医事課 入院係長兼連携係長 今関 信夫

平成23年3月11日の東日

本大震災は、みなさんご承知のとおり未曾有の大災害となりました。

中部ろうさい病院の派遣医療チームは、震災後1カ月が過ぎて、ガソリン、物資のインフラが急速に回復しつつある4月初旬の仙台市、若林区の派遣となりました。

医療チームは、医師1名、看護師1名、薬剤師1名、作業療法士1名、事務職員1名の5名編成での出動となりました。すでに、各地のDMAT(災害派遣医療チーム)が災害初期の医療支援をおこない、避難所での生活が長期にわたるいわば、「災害急性期」から「災害維持期」といえる過渡期の派遣となり、複数避難所への巡回診療がメインとなりました。

診療内容も、慢性疾患があるが、かかりつけの医療機関へ受診できない方へのつなぎ医療や、避難所での急場の共同生活から発生する、皮膚疾患やアレルギー疾患、日中のがれきや損壊家屋の整理をした際の怪我、腰痛などが多くみられました。

当院の派遣時期を考え、医師は内科系医師、看護師は、救急外来のベテラン看護師を起用したことから、この過渡期の多種多様な診療に柔軟に対応することができたように思います。

また、当院の派遣チームから、新たに作業療法士をチームに加えたことから、避難所生活の高齢者の運動機能の低下予防や、腰痛等

の相談に対応することが可能となり、避難所では好評でした。着のみ着のまま避難所生活を続けている方が大半で、常備薬のほとんどを家屋とともに流されてしまい、各地の医療支援チームがそれぞれに臨時の投薬をしていることから、手元にある薬の整理がまったくされていないなく、同じ効き目の薬を2、3種類もっている方もいて、薬剤師が必要な薬を整理する場面もありました。

医療支援活動は実質2日間でしたが、それぞれのチームメンバーがその専門知識をフルに活用して、「いま、ある物資で」「それぞれが協力して」医療にあたる、という医療機関のあるべき姿を再認識した2日間でした。

今回我々は、あくまで「ビジター」として被災地での活動を行いました。次は「ホーム」で我々が同様の災害に遭遇した際に、「何を」「どのように」するべきかを、地域のみならずと本気で考える必要性を強く感じました。



無残な信号機



災害活動を終えて



災害活動報告会

～～ 編集後記 ～～

今回の発刊によせて、東日本大震災で亡くなられた方々のご冥福を心からお祈り申し上げますとともに、ご遺族の皆さまにお悔やみ申し上げます。併せて被災されました皆さまにお見舞い申し上げます。

東南海地震が発生し、いつ同じような状況がご自身の身にふりかかってくるか分からない今、多くの皆さまが避難場所の確認・災害用避難グッズ等の準備をされたことと思います。今回の活動について院内で報告会を行い職員に周知し、災害時、地域の皆さまに安心していただけるよう当院は今後とも頑張っていきたいと思っております。(S.O)

当院の理念

皆さんとの出会いを大切に、苦しみを分かち合い、健康で潤いある生活を送れるよう職員一同努めます。

当院の基本方針

- ・ 医療の質の向上と安全管理の徹底
- ・ 生命の尊厳の尊重と患者さん中心の医療
- ・ 人間性豊かな医療人の育成と倫理的医療の遂行
- ・ 地域社会との密な連携と信頼される病院の構築
- ・ 災害・救急医療への積極的な貢献と勤労者に相応しい高度医療の提供

